

# 戦前生活綴方における教育評価論の誕生

— 小砂丘忠義の理論と実践を中心に —

川 地 亜弥子\*

## The Educational Evaluation of the "Seikatsu-Tsuzurikata" (Life Composition) before the World War II

— focusing on Tadayoshi Sasaoka —

Ayako KAWAJI\*

### 1 小砂丘忠義の教育実践に関する先行研究

本稿では、戦前生活綴方において教育評価論を誕生させたといわれる小砂丘忠義（本名笹岡、1897-1937）の教育評価論について、大正期における彼の教育論と実践をふまえて検討する。小砂丘は、雑誌『綴方生活』（1929-1937）の主宰者として生活綴方運動を推進し、綴方教育を実践していた青年教師たちに大きな影響を与えた。このことから、「生活綴方の始祖」<sup>1)</sup>ともよばれる。小砂丘は、故郷の高知県で1917年から8年8か月の教員生活を送った後、1925年に上京し、池袋児童の村訓導の肩書きを持ちつつも以後教壇には立たずに、全国の子どもたちの綴方に埋もれてその41年の生涯を終えた。このため、彼の教育実践は大正期に限定される。

小砂丘の実践に注目した研究者としては、中内敏夫<sup>2)</sup>、川口幸宏<sup>3)</sup>、太郎良信<sup>4)</sup>が挙げられる。中内は、小砂丘が書くことを教育の中心に位置づけたことに注目し、川口は、小砂丘が文集活動を中心においたことを高く評価している。また、両者とも小砂丘の実践が当時の公教育を否定して、子どもたちが主体的に考え自立した存在となることを目的とした教育であったととらえている。太郎良は、小砂丘の実践の展開に即して編年的に分析し、一、文学教師としての出発（1917-1919年度）、二、教育界の革命の主張と教育実践（1920-1921年度）、三、童謡教育実践と芸術教育論の展開（1922-1925年度）と時期区分した。

本稿では、大正期における小砂丘の教育理論と実践について、とくに教育評価の観点から分析し、戦前生活綴方において教育評価論が誕生する過程の一端を明らかにしたい。

---

\* 大阪電気通信大学講師 Osaka Electro-Communication University

## 2 大正期の作文教育に関する思潮

まず始めに、大正期の作文教育について概観しよう。大正期の作文教育では、明治期の形式主義的をようやく抜け出し、指導の系統化が模索されつつあった。文学の世界では言文一致体が広がり、子どもの学習を支える道具として鉛筆と紙が普及するなど<sup>5)</sup>、作文教育の改革を支える状況の変化も大きかった。

大正期における作文教育の変化に大きな影響を及ぼしたのが、樋口勘次郎（1871-1917）による自由発表主義である。彼は『統合主義新教授法』（同文館、1899年）によって、作文教授の中心に自作文をおき、児童に自由に文を作らせる自由発表主義の教授法こそが重要であると主張した。続いて、芦田恵之助（1873-1951）は『綴り方教授』（目黒書店、1915年）において、「随意選題」という言葉を使用し、次のような指導の系統を明らかにした。

材料（文題の選択（教師）、思想の蒐集（生徒））→自作→指導（構想の指導、発表の指導）  
→処理（批正（教師）、推敲（生徒））

ここで芦田は「自作」に価値をおき、この「自作」については「随意選題」によるものとした。「随意選題」について、芦田は「随意選題といふと、世人はただちに無指導、無処理のやうに解して、攻撃の矢をむけるが、……随意選題とは書くべき想を自ら選定する義」<sup>6)</sup>と説明する。つまり、なんでも自由に書いてよいという意味ではなく、表現したいという欲求が起きるような状況に子どもをおき、自然に起こる欲求を指導して、自分が書きたいこと、書くべきことは何かを見定めながら書かせるという意味である。

これに対して、友納友次郎（1878-1945）が、子どもに題を選ばせるのではなく、表現技術習得のために指導体系を重視すべきであると主張し、いわゆる「芦田—友納論争」が起こった。友納は、綴方には固有の練習順序があるはずであり、そのため子どもに「課題」（綴るべき題を課すること）をすべきであると主張した。この論争は、両者が直接に対決した小倉講演立会演説会（1921年1月）でクライマックスを迎えたものの、すっきりとした解決には至らなかった<sup>7)</sup>。友納による随意選題と自由選題の混乱や、芦田自身の論争に対する妥協もあり、随意選題の意義が十分理解されないまま、題を自由に選ばせればよいという考えが広まっていった。しかし、この論争そのものは、この後の綴方教師たちの作品批評をめぐる議論を先取りしたものとして位置づけることができる。

これらの論争ののち、指導の系統案を具体化する機運が東京高等師範学校系の教師の間で高まり、飯田恒作（1885-1941）がその作成に着手した。飯田は、指導過程に即して、「取材、腹案、記述、推敲、批評と鑑賞、文話」という系統を示した<sup>8)</sup>。田上新吉（1889-1945）は、この系統について、「文章創作の過程に即する指導要綱」（1～4）と、「綴り方生活のあらゆる方面に適当な刺激を与える指導要綱」とに区別した<sup>9)</sup>。この区分には、文章表現指導の系統だけではなく、生活指導の系統を明らかにする契機を見て取ることができる。さらに、田中豊太郎<sup>10)</sup>、飯田の同僚であった千葉春雄<sup>11)</sup>などが飯田らに影響を受けて指導系統案を作成している<sup>12)</sup>。

その後、鈴木三重吉（1882-1936）が自己の綴方指導原理を『綴方読本』（中央公論社、1935年）

に著し、その序で作品批評の規準について次のように述べた。「児童に綴方の取材として求むべきは、ただ児童の通例な日常生活上の事象である。つまり平凡な日常生活の記録であるより外はない。その芸術的価値とは、それを実感的にかいた価値である。実写の価である。これが綴方の製作の到達標準である」。そして、この「芸術的価値」を高めるための指導について、「製作上の必要なる基本的考慮と手続き」として、題材、記叙の形式、構成、言葉と表現と製作の態度、叙写の進度を挙げた。これについて横須賀薫は、「[芦田や飯田のような]文章表現の過程に即した指導の系統とは基本的にちがっている。指導系統論ではなく、表現についての価値評価の基本的視点といってよいものである」<sup>13)</sup>と述べている。ここに至って、表現技術や指導のプロセスという観点からではない、作品の「芸術的価値」からの作品批評の観点が示されたのである。

以上のように、小砂丘が学校で実践にとりくんでいた大正期は、「芦田—友納論争」が起こり、課題による表現技術指導重視か、随意選題重視かという観点が論としては提出されていた。しかし、通常の尋常小学においては、模範文を示してほぼそのとおりに書かせる指導が主流であった。このような時代に、小砂丘は独自の子ども観、綴方観を持って、実践を展開していった。彼は「何々式だの、何々主義だのといふ縄ばり内にこもる流行の嫌な私である。……十年と経つ中には勿論自分も成長する。自分が成長すれば私の綴り方も成長するだろう。……かくすればうまくいくといふ、教授妙法があつたとすればそれは綴り方造りの骨董いぢりの閑つぶしに過ぎぬ」<sup>14)</sup>と考え、一つの教授法にこだわることなく、自分なりのやり方、指導を日々進歩させることに重きをおき、実践を行ったのである。

### 3 大正期の小砂丘の教育実践と作品批評

#### (1) 杉尋常小学校における小砂丘の実践

1917年に東本山村杉尋常小学校訓導となり、小砂丘の高知県での8年8か月の教師生活がスタートした。ここでは彼の実践を校長がよく理解してくれ、さらに健康にも恵まれたため、充実した活動がおこなえたという。「その校長<sup>15)</sup>はその私を可成知つてくれてみたので、村人との間に立って数回ならず彼らを説得してくれてみた」との回想がある<sup>16)</sup>。

彼は教壇に立つ当初から綴方に注目していた。小砂丘は、当時一般的に行われていた綴方指導について、「殆ど範文扱までされた国語読本がまづ、何の例外なしに完全に死にきった文章であったこと」<sup>17)</sup>などによって、優等生ほどこれまでの綴方からぬけだすのに時間がかかったと述べている。このころは尋常小学校高等科において国定第二期の教科書を使用しており、読本には軍事教材、国家主義的教材が多く登場していた。このような教科書の文章や価値観になれていた子どもたちには、小砂丘の指導は新鮮でかつ理解しにくいものであった。彼は「Tがやつと『冬の山にて』を書きまでには六ヶ月もかかっている。頭の良いKがやつと『お祭り』といふのをかいたのは私がやりかけてから一年六ヶ月目であつた。……その間Kが苦しんだ様子は可哀相であつた」<sup>18)</sup>と回想している。

小砂丘は子どもたちの視点を自由にするために、題材の選び方、ものの見方について、一般的な綴方指導の枠組みにこだわらずに指導した。彼は自らの指導について、「決して教訓めいた丸出しの説法だけはしてこなかったつもりだ。時に伝記や逸話も話し、名作の物語なども、むろん

直接文章上の批評もやれば、語法の話しも一通り、人のやることはやつたにかはりない。ただやり方は或は少々違ってゐたといふが本当だらう」<sup>19)</sup>と述べている。様々な雨の様子を板書して子どもたちから雨に関する題をひきだしてみたり、写生の時の見取枠の話などをして、題材の選び方、物の見方を指導した<sup>20)</sup>。なお、上述からもわかるように、彼は写生を取り入れていたが、当時の図画指導は文部省の画帳に載っている水彩画や鉛筆画を模写させることが一般的であったから、これもかなり進歩的な実践であった<sup>21)</sup>。彼はその指導を通して「絶えず細心に、彼らの心の芽生えがどこに出るか」<sup>22)</sup>をじっと見ていたという。

1919年3月、彼にとって初めての文集『山の唄』を出した<sup>23)</sup>。この文集は、高等科の生徒とともに作ったもので、小砂丘が指導を始めてから約2年が経過しており、文集作りが計画されてからでも1年以上かけて作られたものである<sup>24)</sup>。この時代は文集をつくること自体が先駆的であった<sup>25)</sup>。彼は非常に熱心に文集づくりに取り組み、『山の唄』第一号は謄写版刷りで出されている。謄写版は普及し始めたばかりであり、綴方の印刷に使うことは珍しかった<sup>26)</sup>。なお、第二号・第三号は友人に借金して活版印刷で出している。

第一号では、まず子どもたちに既存の価値観にとらわれずに自己を形成するよう訴えていることに注目しよう。「『吾人は吾人の吾人なり。』〔中略〕この名誉こそは私達の命がけになって保護しなければ主張しなければならぬものである」と主張している。

さらに、彼は子どもたちの伸びゆこうとする力が他からの圧力によって曲げられることに非常に敏感であり、強力に抵抗していた。「美しい心の成長を私はいつまでも祈ります。いろんないたづらもののために〔中略〕萎まねばならぬ花がありはせぬかと私は悲しい」とある。また、1919年4月に、長岡郡立臨時准教員養成所（修業年限1年）が杉小に併設され、小砂丘も教官を兼務したときに、子どもたちに「師範へなんぞへ行くな」<sup>27)</sup>と言って、養成所への入学を勧めたという。第一期生として、彼の教え子が卒業後に在籍している<sup>28)</sup>。当時の師範学校には、精神・学問の自由がほとんどなく、全員寄宿舎に入って舎監の下に規則正しい生活を要求され、読む本も制限されていた。小砂丘自身も何度も本を没収されており、退学させられた友人もいた。このような個人の独立を認めない師範学校へ、教え子を送りたくなかったと考えられる。

第二号でも、綴方を書くことは人生で最も重要なことと訴え、その理由を、自己の考えを自分自身だけでなく他者へも明らかにすること（またはその練習）になるからだとしている。そして、上手な綴方の条件として、①思想が読者に達すること、②読者を感銘させること、③自己の文を作ること、④文字（表現）を精選することを挙げている。

このころ、小砂丘は、上京した友人中島菊夫から児童雑誌『綴方の友』を発行しようと持ちかけられたのがきっかけで、高知で『児童文学』という小学児童綴方専門月刊誌を発行しようとした<sup>29)</sup>。発行できていたら『赤い鳥』に先駆けたものになった可能性もあるが、残念ながら実現されなかった。小砂丘はこのころに、「革命は土佐の山間より」という自由民権運動の標語を口にしており<sup>30)</sup>、高知から日本の教育を変えていこうという気概を持って綴方教育に取り組んでいたと推察される。

しかし、『山の唄』は、それより後に小砂丘が指導した文集と比べると、小砂丘自身の論考、作品が多く掲載されているという特徴がある。第一号では、全44ページ中14ページ以上、また、第二号では、全47ページ中約15ページを、小砂丘自身が書いている。子どもたちを綴る主体とし

て位置づけて独立をうながそうとしていたにも関わらず、その教育方法は、自論を子どもたちに強く主張するものとなっており、矛盾があったといえよう。小砂丘自身も「三年位教壇に立ってみて始めて僕は教育が外からゆくべきものでなく、内から外へと伸び上がるはずのものだということに気づいた」<sup>31)</sup>、「大正九年一月四日、之が私の為には記念すべき日である [中略] 不平ばかりいって破壊の手ばかり出してゐては到底教育界の為によい結果は来たらぬことを知った」<sup>32)</sup>と回想している。このころに彼の理論と実践の転換があったと考えられる。

## (2) 教員に対する教育改革の主張

1920年3月、土佐郡旭尋常高等小学校に転任した<sup>33)</sup>。「その学校の空気の沈滞が恐ろしく不快でたまらない」<sup>34)</sup>ため、まもなく朝鮮行きを計画、校長に話したところ快諾を得るが、病に倒れ4か月入院する。その間に朝鮮行きの話は立ち消えになったようである。退院後、1921年1月に土佐郡布師田尋常高等小学校に転任する。ここでは新たな気持ちで指導に臨もうとしていた<sup>35)</sup>。しかし、3か月で転任することになる<sup>36)</sup>。このころは転任を繰り返しており、小砂丘の教師時代の中でも思うように実践の行えなかった時期といえよう。その一方で、教員達に対して、附属小学校初等教育研究会の研究発表で、次のような教育改革の必要性を訴えた<sup>37)</sup>。

### 教育界革命梗概

#### 一、社会状態瞥見

- イ、民衆ノ文化的地位
- ロ、民衆ノ道徳的方面
- ハ、民衆ノ政治的方面
- ニ、民衆ノ教育的方面

#### 二、教育ノ任務

- イ、教育トハ何カ
- ロ、教育力 家庭・社会・教会・自然
- ハ、学校教育ノ孤立 ノ意義

#### 四 [ママ]、学校教育ニ就キテ [後略]

ここには、彼が社会状態から民衆全体が成長する必要性を感じ、そこから教育の任務を考えたことが記述されている。そして、「綴方の極北」<sup>38)</sup>において、教育においてなぜ綴方を重視するのか根拠を示した。

- 一、綴り方ハ図画トトモニ人間ヲ芸術家ノ境地ニ立タシメルモノデアル。手工、裁縫ハ同ジク発表教材ナレドモ質ニ於テ自由ヲ限定サルル形アリ。唱歌ハ耳ノ訓練、口舌他諸官ノ訓練ノ足ラヌ児童ノタメニヨリ困難デアツテ又ヨリ自由ガ限定サレテ来ル。人ハ自由ノ境地ニ立ツテ始メテ偉大ニナリ得ル。
- 二、綴り方ハ形式ヲ超越スル。
- 三、綴り方ハ人間ヲ作ル。

綴方が芸術性を持つこと、自己表現が容易であること、他のものに比べて既存の形式に制約さ

れにくいことをとらえて綴方を重視したことがわかる。つまり、子どもをより自由にするために綴方に力を入れようと考えたのである。

その後、1921年3月、土佐郡十六村行川尋常高等小学校に再び転任する。教師は校長を除いて男2名女2名の小さな学校であった<sup>39)</sup>。彼はこのころすでに異端視されていたが、校長が干渉しなかったため<sup>40)</sup>、文集だけでなく、同人誌『極北』(中島菊夫、吉良信之と共にSNK協会を組織して発行)にも取り組むことができた。

このころの小砂丘は、教員や視学など教育に携わる人々に対して、個人の独立を阻む行動を鋭く批判することと、独立を阻まれている人に独立せよと励ますことをあわせておこなっていた。たとえば、教員の独立を脅かす視学や校長には「其人を生かす心を忘れてはならない<sup>41)</sup>」と言い、教員自身には、校長・視学にとらわれず「教師たる前に於て先ず人になれ<sup>42)</sup>」と述べた。当時、臨時教育会議では、教員の講習方法を改め、視学を増員するなど、教師たちに対して指導監督を強めることが取り上げられていた。この時期に講習会や校長・視学に対して批判的態度をとることは、勇氣ある行為であったといえよう。

さらに、保護者に対しても子どもたちが自由に綴ることへの理解と励ましを求めようとした。12月に発行した児童文集『おとどひ』では、「もしこんなことをかいてあるのがよくないといはれたなら私からおわびをします、これは、お父さんやお母さんにはなしておきなさい<sup>43)</sup>」と述べている。小砂丘は、自分の考えを包み隠さずに書いていたため、師範学校の教師や短期現役兵のときの上官から作文や日記を否定されたという経験がある。子どもたちが綴るときに自分と同じ思いをしないように、自由に綴ることができるようにとの配慮が感じられる。

### (3) 評価観の転換——教育のための評価の模索

小砂丘は、1922年4月、5つ目の転勤校である土佐郡梅ノ木尋常小学校の訓導兼校長となった。教師は新卒の女教員一人<sup>44)</sup>、2学級89名<sup>45)</sup>の小さな学校であった。彼は、自分の教育理念・実践が受け入れられず、転任のたびに「山へ山へとはいりこんでいく<sup>46)</sup>」悲しみを感じつつも、実践に集中し、これまでの主張を実行に移した。担任したのは1・5・6年生の複々式学級(男子18名女子24名)<sup>47)</sup>であった。

この学校でも「こどもたちを伸びゆく自然にまかせたい<sup>48)</sup>」と考え、子どもたちが既成の道徳観念や、教師の指導・評価にとらわれずに、自分の力で成長するようにしたいという抱負を抱いている。ここでは、文集などに小砂丘の理論は展開されておらず、文集作りにおいてすべての子どもたちの綴方を対象としている。彼は子どもたちの自己教育力を信頼し、尋常小学校のすべての子どもたちの独立を保障することに徹したといえる。

回想には、「山のこどもは唱歌が下手です。体操など一つもできません。それに綴方は皆目だめでなかなか骨がおれます<sup>49)</sup>」とあり、綴方以外の教科指導にも力を入れていることがわかる。また、当時学校ではパン(メンコ)が流行しており、多くの学校では、ばくちの始まりとして禁止していたのだが、それを体操と算数の授業の一環として積極的に取り入れていった。子どもたちの興味をとらえてこだわりなく教育活動をおこなう姿勢がうかがえる。この学校では、文集『蒼空』の発行を月例行事として設定している<sup>50)</sup>。

小砂丘はここで校長として、優等賞でなく学科賞を授与していた<sup>51)</sup>。津野によれば、思いもよ

らない者が学科賞をうけて大いに努力するようになったということである<sup>52)</sup>。ほぼ全員の生徒に賞を与えて、それぞれの活動を正当に評価し、励ましたのだろう。彼は、優等生を作る意味について、「優等生のために優等生を作るのではない。教育のために優等生を作るのである」<sup>53)</sup>と述べていた。特に、学校が筆記による暗記再現力や操行によってしか子どもを評価できておらず、「先生その人の小模型」<sup>54)</sup>のような子どもを作りだしていることを指摘し、さらにそのように子どもの一面の能力しか表していない成績が就職先にまで影響を与えることを鋭く批判した。つまり、学校の評価方法が子どもの能力を一面的にしか評価できず、独立のエネルギーを先生への盲従へのエネルギーへと転化すること、その上子どもの卒業後の経済的独立にまで影響を及ぼすことを厳しく批判したのである。これらは、従来の評価規準を、お手本どおりからその子どもらしさへ、教師に対する服従から独立へと転換するものであったと言える。

しかし、ここでは評価の主体は小砂丘である。自分の価値観を示すことはやめ、教育活動の中心を子どもたちにして彼らの独立を育てようとしたが、作品も教育活動も評価はすべて小砂丘がおこなうということは、子どもたち自身が評価の主体となっていないことを示している。個人の独立を目指すならば、子どもたちの内からの自己評価能力の育成は重要な課題となってくる。

### (3) 文集作りにおける主体の移行

1923年3月、彼は長岡郡岡豊小学校に転任した<sup>55)</sup>。ここでは同じクラスを持ち上がりで二年間担任できた。彼はこの学校で、文集『蒼空』(第4号～第13号)<sup>56)</sup>を発行し、文集作りの中心を自分自身から子どもたちに譲った。これまでの文集は、編集・発行がすべて「小砂丘忠義」となっていたのが、この学校では第6号(1924年2月発行)以降「蒼空係り」という奥付が見られる。「表紙やカットを書く子供、曲譜をつける子供、童話を書く子供、みんながめいめい、自分のやることを持ちよつてできた雑誌」<sup>57)</sup>であったと回想している。小砂丘は謄写版などを使う部分を担当して蒼空係を助けながらも<sup>58)</sup>、子どもたちが主体となって発行したのだ。そして、文集が出来上がると、子どもたちは「二三時間割いて読んだり雑談したり……修身にも地理にも歴史にも代用」<sup>59)</sup>した。教育活動の中心に文集作りがおかれたことがわかる。

このような文集づくりを中心とした活動を積み重ねる中で、子どもたちは小砂丘の手を全く借りないで文集を出したいと言い出した。「第一号の用紙や原紙、インキなど買ふ金だとして精細な計算をしてゐる。[中略]翌朝きれいに二十頁近くのものだったらう。書き上げてきたには又驚かされた。[中略]全く彼らの自分の手になったこの文集を非常にうれしかった」<sup>60)</sup>と彼は述べている。小砂丘の援助なしに、計画から実行まですべて自分たちの力でおこなった原動力は、子どもたちの独立を第一に考えた小砂丘の教育実践で培われたと考えられる。

さらに、小砂丘は「自分だけでどしどし考へたりはたらいたりするのでなしに他人にいはれるとはつと思つたり、他人に言はれはすまいかと心配してゐる人」<sup>61)</sup>ではいけない、と自分で考えることの大切さを文集の中で子どもたちに述べている。このことが小砂丘のクラスでどのように受けとめられていたかを表す事件が一つある。雑誌からの盗作が投稿されたときの子どもの対応である<sup>62)</sup>。「[子どもから]『他人のをぬすんで書きやすいよいちやいか(たやすいことぢやないかの方言)』といはれた時の[盗作した]当人の自責と後悔の念でいっぱいになった顔を見た時には私[=小砂丘]もはつとした。彼らの制裁は実に簡潔である。そしてそれつきり後は何もない。『……

自分の好きなのがあったら、その作者の名を書いて出す様にしよう』といったことだ<sup>63)</sup>。このとき、子どもたちは、雑誌でよいと評価される作品を写すよりも、自分が考えることこそ価値があると考えるようになっていたのである。

#### (4) 集团的合評作業における批評の特徴——「蒼空句会」を中心に

小砂丘は、文集作製において教師がおこなっていた掲載作品の選出を、子どもたちに任せていった。子どもたちが6年生になると、小砂丘とクラス全員で「蒼空句会」を作って、文集に載せる俳句の選出はすべてそこでおこなったのである。彼は子どもたちが作品を選ぶ場面では自分の評価を押しつけるような態度は一切とらず、彼らの評価を尊重した。

「蒼空句会」では、小砂丘も子どもたちと同じように句を出し、選を行った（資料1参照）。これを小砂丘は「相互選句」と読んでいる。資料中の「他田よし」は小砂丘のペンネームであり、教師の作品も子どもの作品も一緒に評されたことがわかる。

#### 資料1 蒼空句会

[出典：文集『蒼空』第9号、1924年5月15日発行、pp.12-13。]



「蒼空句会」は、係の子どもが、作者名を伏せて、みんなの句を黒板に書き並べ、それを子どもたちが一つ一つ取り上げて意見を出し合いながら点を加えていくという方法をとる。名前を伏せることで、気兼ねなく作品批評することが可能となっている。小砂丘も、子どもたちと同じように句を出し選をした。もちろん、このような批評は教師と子どもたちの信頼関係があって初めて成り立つものである。たとえば、小砂丘の句に対して「やっぱり先生の句か。なんちゃわからんと思った」というような率直な批評もあったと小砂丘は回想している<sup>64)</sup>。

また、小砂丘は、文集『蒼空』で「みんなの文にはみんなの一人一人の心があらはれておなければならぬと思ひます。やはり、これは、この人でなければかけぬといふ様な文がよいのです。



字は、これは高橋、これは重、これは紀、これは弘とわかるが文もそこまでいきたいと思ひます。名前さへかへればだれの文にでもなれるやうなのはよくない文です」<sup>65)</sup>と指導している。さらに、「蒼空句会」において、これが誰の作品かを話し合い、あたれば喜んだという記述があるため、この人だから書ける句、個性のあらわれた句というものを認めあい、作品批評の規準として共有していったのだと考えられる。

以上より、小砂丘の「蒼空句会」においては、①批評の主体として子どもを位置づけており、教師の俳句も批評の対象としてあがっていること、②批評の規準として、個性の表れた句がよいということが共有されていること、③個性をはっきりと示すに至らなくとも、子どもが自分なりに考えた作品がよいということが小砂丘から示されていること、を特徴として挙げるができる。

しかし小砂丘はこの学校を最後に教師を辞める決心をする。彼は仕事をすればするほど校長と同僚から煙たがられ、もう出て行く以外にないと考えたためであった。しかし、視学が次の在任校を紹介したために、再び転任した。そこには9か月しか在任しなかったが、教育方法、特に評価法はさらに変化している。

#### (5) 通知票にみる小砂丘の評価観

彼は、1925年4月から12月まで、長岡郡田井第一尋常小学校に在任し、最後の教師生活を送った。辞職して上京するときの保護者への挨拶で、「三年以上はいて、きっと何とかの仕事をして見るつもりでいました」、「折角たてた経営案も十分に自分の手でおこない得なかった事を、まことに心残りに思いますし、皆様にも相すまなく思います」<sup>66)</sup>と述べており、一度は教職を去る決心をしたものの、少なくとも3年の見通しを持った教育計画を立てていたことがわかる。

ここでの小砂丘の教育実践は、彼の教え子の沢田年（当時6年生）の報告<sup>67)</sup>に詳しい。田井校は谷間の寒村にある複式三教室学校で、児童数は60名ほど、校長兼訓導の小砂丘の他は女教員二人<sup>68)</sup>の小さな学校であった。女教員は二人とも小砂丘の教え子で、気心がお互いによくわかって万事に都合がよかったという。小砂丘は、男女混合の12名のクラスを担当した。彼は、赴任するとすぐに歴史物語の額縁をすべて取り払って、前任校の子どもたちの絵を掲げた。そのため、視学には嫌われたが、子どもたちには好かれたという。また、個々の子どもの家庭状況をよく把握し、誰が教科書や学用品を買えないでいるか、誰が昼飯を抜いているかなど細かい配慮をしており、彼らを傷つけぬように気を配っていた。授業中に女の子がおぶってきた赤ちゃんがはげしく泣いてやまず、子どもたちが口々にののしると、一度も子どもたちを怒ったことのなかった小砂丘が、「Tやんは家の都合で仕方なしに子守をしもって学校へ来ゆうがじゃきに、そんなむごいことを言うもんじゃない。皆がTやんちゃったらどんな気がするぞ」と厳しくさとしたという。

小砂丘は評価の観点を示す通知票を自分で作成していた（次ページ資料2参照）。画用紙を二つ折りにしたガリ版刷りの物で、当時の一般的な通知票（甲乙丙の評語を使用した成績欄、出欠欄、身体検査欄、学校家庭通信欄、校訓や教育勅語などで構成されている）と比べると、独自性のある通知票であった。

まず表紙の上方に、横書きの「素人にまで」という見出しがあり、ここに彼が教育において目指す人間像を示した。「素人とはほんとの人間といふ／ことである [中略] 他から細工されず迷

はされて／ゐないキヂの人間である／子供は純真でかつ勇敢で／大人よりか素人に近い／吾らは子供のよい処を忘れずキヂ／がぬけずキヂのままを成長させた／人——つまり素人に目標をおく」<sup>69)</sup>と示されている。上京後に小砂丘の子ども観として提出された「原始子供」の原型と考えられる。これを見ても、他からの影響で安易に自分の考えを変えるのではなく、自分で考察することを重視していることが伺われる。

また、各教科の点数は「量的表示」として百点法で記入されるが、他は個人内評価を記述する欄である。彼は、この通知票を子どもたちの成長の記録であり、自分がどのように彼らの成長をとらえているかを子どもたちや保護者に伝える手段であると考えたようである。「生命のきざしⅠ」の中の「既ニ伸ビ出シ方面」「未ダ伸ビ出ヌ方面」という表現には、彼が子どもたちを成長過程にある存在としてとらえ、その到達点だけではなく発達のきざしに注目して指導しようとしていたことが表れている。また、「生命のきざしⅡ」では「作業ニ対シテ」「他人ニ対シテ」とあり、ここでは、「作業」「他人」といった自分以外のものに対する働きかけの芽生えに注目していたことが示されている。

資料2 小砂丘作成通知票

[出典：沢田すすむ「そのころの小砂丘忠義先生」『作文と教育』1961年7月、p.76.]

生命のきざしⅡ				生命のきざしⅠ				量的表示							
Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
								第一大学年ノ課程ヲ修了シテシコトヲ權入	90	90	90	90	90	90	90
								既伸ビ出シ方面	95	95	95	95	95	95	95
								未ダ伸ビ出ヌ方面	90	90	90	90	90	90	90
								作業ニ対シテ	95	95	95	95	95	95	95
								他人ニ対シテ	90	90	90	90	90	90	90
								コソラツキチ感	90	90	90	90	90	90	90

素人にまて  
澤田 すすむ

人生とはほんとの人間といふ

田開第一専修小学校

各 石 塚 川 山 谷 子

特に注目したいのが、「指導者の感じ」の「将来努力すべき点」の欄にある「自己ノ成長ヲ感得シツツ自分デヤツテユケルトコロマデ研究ヲ続ケサセテミタイ」との記述である。これは沢田の通知票であるが、自己評価の力を持って、小砂丘の援助がなくても独立して研究ができるようになるまで指導したい、という子どもの独立への熱意が感じられ、さらに保護者にも理解を求めた姿がうかがえる。彼はその指導を通して「絶えず細心に、彼らの心の芽生えがどこに出るか」<sup>70)</sup>をじっと見ていた。ここでは他の物の見方に依存しない独立した視点を持つ心の芽生えに注目して

指導していたといえる。

彼は、子どもたちが意欲を持って学習・研究が続けられるように、斬新な教育を展開した。以前から、教師が何もしないで子どもたちを自由放任するのではなく、優れた教材を使い、指導法にも工夫をこらすなかで、「みんなよいと思ふ方へ進め」<sup>71)</sup>というのが児童本意であると述べていたが、それがこの学校の実践によく表れている。たとえば、理科では火山の実験を行い、読本の中にコーヒーが登場したとき<sup>72)</sup>には、当時貴重品であった白砂糖を、さらに高価であったコーヒーに入れて子どもたちに飲ませた。唱歌では、自分で編集した<sup>73)</sup>童謡集『うた』を教材とし、タクトを用いて、村では当時行われていなかった輪唱などの歌唱形式を教えた。また、図画では画帳を一切廃し、村では販売されていなかったクレヨンを子どもたちに自由に使わせ、自分も子どもたちと一緒に、校外で写生をした。作品は丁寧に批評し、額縁に入れて壁に飾った。また、村には本屋がなく、学校図書も皆無に等しい中で、読書の大切さを説いた。沢田は、友達や先生や大人から種類を問わずに借りて、何度も何度も繰り返し読んだという。

ここでも文集活動が重視されており、一学期末に文集『蒼空』<sup>74)</sup>を刊行した。しかし、子どもたちに作品批評はゆだねていない。指導を始めて日が浅かったことを考慮に入れなければならないだろう。しかし彼は、「生徒が明るい心で進んで勉強しようとするような、たとえ幼いなりにでも独り立ちしてどこへ行っても困らぬようにやっていける、その基礎を作るのを今年一ぱいの仕事と決めて」<sup>75)</sup>いたと述べている。たとえ短い間でも、子どもたちが独立し、教師の手を離れても自分たちで研究を進めてゆく力を育てる教育を彼は目指していたと考えられる。

1925年11月、彼はついに教壇を離れ、上京した。以後は教師向け綴方雑誌『綴方生活』の編集を通して各地の綴方教師の活動と交流を励まし、また、子ども向け綴方雑誌『鑑賞文選』(1930年9月から『綴方読本』と改題)を通して子どもたちの綴方を指導をすることで、教育界に新たな流れを生み出していったのである。

#### 4 小括

本稿では、大正期における小砂丘の教育理論と実践について、教育評価の観点から分析した。小砂丘は、大正期の実践において、教師と子どもの独立を求め、優等と劣等の評価規準に疑問を投げかけていた。また、作品批評についても、子どもが教師から独立して考え、表現できることを重視して、雑誌に掲載された作品に似た作品がよいのではなく、その子らしい作品がよいのだと考えて批評規準を転換していた。「蒼空句会」においては、子どもの個性(他の誰かのまねではない、その子どもらしさ)を重視し、教師が批評の主体となるのではなく、教師も子どもも同じ批評者として位置づけていた。さらに、通知票の記述でも、他者からの規準によってではなく、子どもが「自己の力」をつかむこと、つまり自己評価が重視されていたことが明らかになった。東京高師系の教師の間で探究されていたような綴方指導の系統化は行っておらず、子どもの目を多方面に開き、自己評価を支える指導を中心に行っていたといえるだろう。

今後の課題としては、上京し、編集者となって以降の小砂丘の教育評価論について明らかにすることが挙げられる。彼は、1936年半ばごろを境に、作品批評において意欲重視から技術重視の立場へと移行したと指摘されている<sup>76)</sup>。なにゆえこのような移行が起こったのか、小砂丘の論考

とともに、作品批評の実際をふまえながら分析を進め<sup>7)</sup>、彼の教育評価論の特徴と意義について明らかにしていきたい。

※本論文は、平成18年度大阪電気通信大学芸術系・文系・数学系研究補助費による研究成果の一部である。

## 注

- 1) 日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書、1958年、p.587。
- 2) 中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、1970年。中内敏夫『中内敏夫著作集 V 綴方教師の誕生』藤原書店、2000年。
- 3) 川口幸宏『生活綴方研究』白石書店、1980年。
- 4) 太郎良信『生活綴方教育史の研究——方法と課題』教育資料出版会、1990年、p.125。
- 5) 石附実編著『近代日本の学校文化誌』思文閣、1992年。
- 6) 沖垣寛、中村義一、遠藤与治右衛門編『芦田恵之助先生の道と教育——語録』小樽恵雨会、1957年、p.112。
- 7) 白鳥千代三編『小倉講演 綴方教授の解決』目黒書店、1921年に詳しい。
- 8) 飯田恒作『綴方指導の組織と実際』目黒書店、1926年。
- 9) 田上新吉『綴り方指導原論』目黒書店、1927年。
- 10) 田中豊太郎『綴方指導系統案と其実践』賢文社、1932年など。
- 11) 千葉春雄『綴方指導系統案一覧表』厚生閣、1929年など。
- 12) 東京高等師範附属小学校教師の指導系統案については、以下の研究が参考になる。高森邦明『大正昭和初期における生活表現の綴り方の研究——東京高師付属小学校教師の実践と理論』高文堂出版、2002年。前田真証「大正後期における綴り方教授細目の考察」『福岡教育大学紀要』1984年。前田真証「田上新吉氏著『綴方指導体系』の考察」『教育学研究紀要』第29巻、1974年。前田真証「大正期における綴り方教授組織論の展開——飯田恒作を中心に」『教育学研究紀要』第34巻、1989年。
- 13) 横須賀薫『『生活と表現』における指導の系統——主として遺産継承の観点から』『国語の教育』1969年7月、p.41。
- 14) 小砂丘忠義「私の綴方生活」『教育の世紀』1926年9月号、p.103（民間教育史料研究会編『教育の世紀』復刻版第12巻、一光社、1984年所収）。
- 15) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』百合出版、1974年、p.94によれば、中島虎義。
- 16) 小砂丘忠義「転任漫談」『教育の世紀』1927年3月、p.55。
- 17) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.105。
- 18) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.110。津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』（p.32）によれば、Tは津野松生、Kは門脇勇喜。
- 19) 小砂丘忠義「私の綴方生活」pp.106f。
- 20) 小砂丘忠義「私の綴方生活」pp.105f。
- 21) 図画指導において、手本の模倣を廃し、写生画・自由画を描く児童自由画運動を始めた山本鼎が、信州小県の神川小学校で第一回児童自由画展を開くのは1919年のことであり、小砂丘の写生指導はこれとほぼ同時期である。
- 22) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.110。
- 23) 第三号まで続いた。なお、第三号は小砂丘が転任後に発行されている。
- 24) 前書きに「文集を作らう」という話が出たのは前年の春先であったと書いてある。小砂丘、前書き、『山の唄』第1号、1919年3月、p.1参照。

- 25) 日本作文の会編『学級文集の研究』（『戦前戦後日本の学級文集』別巻）大空社、1993年、p.46。
- 26) 最も早い時期の学級文集としては、峰地光重のつくった『綴方成績・高等科』（鳥取、庄内小学校、1914年）が挙げられる。これは子どもたちが筆で清書したものをそのまま綴じ込んだものであった。
- 27) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.94。
- 28) 石川晶森、豊永（のちの津野）松生。
- 29) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.63。
- 30) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.160。
- 31) 小砂丘忠義「村に来て」『教育の世紀』1926年1月、p.115（民間教育史料研究会編『教育の世紀』復刻版第12巻、一光社、1984年所収）。
- 32) 小砂丘忠義「若き教育者に送る」発表年月未詳（中内他1993、p.81所収）。
- 33) 小砂丘は妻の看病で欠勤が続き、病院に近い学校へ転勤になった。
- 34) 小砂丘忠義「転任漫談」『教育の世紀』1927年3月、p.56（民間教育史料研究会編『教育の世紀』復刻版第12巻、一光社、1984年所収）。
- 35) 小砂丘忠義、高石正治宛の手紙、大正9年12月31日付（津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.187所収）。
- 36) 原因は「私があては邪魔になると彼自身が恐れた所の中年の恋を校長がしてみたこと」であつたらしい。（「小砂丘忠義「転任漫談」p.58）。
- 37) 小砂丘忠義『附属小学校初等教育研究会（国語科）研究発表梗概』、1921年1月、小砂丘文庫所蔵。
- 38) 小砂丘忠義「綴方の極北」『附属小学校初等教育研究会（国語科）研究発表梗概』1921年1月。
- 39) 小砂丘忠義、高石正治宛の手紙、大正10年4月18日付（津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.188所収）より。
- 40) 「校長は……大体無干渉で私を働かせてくれた。……すっかり私にまかせっきりでなんでもやらしてくれる」との回想がある（小砂丘忠義「転任漫談」p.59）。
- 41) 小砂丘忠義「視学論」『極北』第2号、1921年7月（中内敏夫他編『小砂丘忠義教育論集』上、p.58所収）。
- 42) 小砂丘忠義「能く動く人動かぬ人」『実業青年』第1巻第1・3号、1921年3・6月号（中内敏夫他編『小砂丘忠義教育論集』上、p.45所収）。
- 43) 小砂丘忠義「おとどひにつきて」『おとどひ』1921年12月、p.13（日本作文の会『戦前戦後日本の学級文集』第9巻、p.249所収）。
- 44) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.107。
- 45) 小砂丘忠義「山のたより」（『極北』第5号、1922年6月、津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.107所収）での記述や、太郎良『生活綴方教育史の研究』によれば、91名。しかし、梅ノ木校時代の『学校経営覚書』（小砂丘自筆、小砂丘文庫所蔵、1922年と推定）を見ると89名。よって本稿では児童数は89名とする。
- 46) 橋本ひとし「二つの書簡——小砂丘のこと」『作文と教育』1961年8月、p.49。
- 47) 小砂丘自筆、梅ノ木小卒業式用『呼出簿』（小砂丘自筆、小砂丘文庫所蔵、1922年と推定）から算出。1年生男子8名女子8名、5年生男子8名女子7名、6年生男子2名女子9名。なお、2年生男子4名女子9名、3年生男子7名女子8名、4年生男子15名女子4名。
- 48) 橋本ひとし「二つの書簡——小砂丘のこと」pp.49f。
- 49) 同上書、p.50。
- 50) 『学校経営覚書（仮）』の「毎月行事」に「月末、『蒼空』発行」とある。なお、『蒼空』は、転勤してのち岡豊校、田井校でも続けて使われており、号数も通してつけられている。
- 51) 『学校経営覚書（仮）』では「梅ノ木校褒賞規定」、「学事報告」（受賞者数記載）がある。また、梅ノ木校卒業式（修了式）の『呼出簿』には「受賞者名簿」がある。津野は、「学期ごとに」おこなっていたと述べているが、確認できなかった。
- 52) 津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.103。
- 53) 小砂丘忠義「優等生論」『極北』第4号、1922年2月（中内敏夫他編『小砂丘忠義教育論集』上、p.73

- 所収)。
- 54) 同上書、p.73。
- 55) これは、彼の教員生活中、唯一自分から申し出での転任であった。病父の看病をするために自宅から通勤するためであった。このときの転任の条件として、①『極北』をやめること、②吉良、中島と絶交すること、③頭髪をのばさぬこと、④中折帽をかぶること（津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』p.166）を要求された。
- 56) 前任校でも『蒼空』を発行しており、発行号数は続きの4号からつけている。
- 57) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.112。
- 58) 『蒼空』は、十三号までは小砂丘の筆跡であるため、そこまでは小砂丘が謄写版を使っていたのであろうと考えられる。
- 59) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.112。
- 60) 小砂丘忠義「私の綴方生活」pp.113-114。
- 61) 『蒼空』第7号編集後記、1924年2月25日、小砂丘文庫所蔵。
- 62) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.112。
- 63) 同上書、p.112。
- 64) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.109。
- 65) 『蒼空』第8号編集後記、1924年3月25日、小砂丘文庫所蔵。
- 66) 小砂丘忠義「校下父兄への挨拶」（橋本ひとし「二つの書簡——小砂丘のこと」p.50所収）。
- 67) 沢田年「わが師小砂丘忠義先生」高知県「勤評の会」編『42人の手記』亜細亜書房、1985年。沢田すすむ「そのころの小砂丘忠義先生」『作文と教育』1961年7月。
- 68) 立川出身の石川晶森、田井出身の沢田恒子（沢田の従姉）。
- 69) 沢田すすむ「そのころの小砂丘忠義先生」p.76。
- 70) 小砂丘忠義「私の綴方生活」p.110。
- 71) 小砂丘忠義「主張二」『極北』第二号、1921年7月（中内敏夫他編『小砂丘忠義教育論集』中、p.388所収）。
- 72) 沢田によれば、「トラック島便り」（尋常小学国語読本巻9第二）であるが、これにはコーヒーに関する記述はない。尋常小学国語読本巻十一第二十三課「南米より」の誤りであろう。
- 73) 唱歌の教科書は当時まだ国定ではなかった。1941年の国民学校令によって国定となったのである。
- 74) 梅ノ木小学校からの通し番号では第14号である。
- 75) 小砂丘忠義「校下父兄への挨拶」（橋本ひとし「二つの書簡——砂丘のこと」p.50所収）。
- 76) 碓井岑夫「小砂丘忠義の綴方理論とその転回——『綴方生活』誌を中心に」『季刊教育運動』あゆみ出版、1977年。
- 77) 上京してからの小砂丘の作品批評についての研究としては、佐藤さつき「1920～30年代における綴方作品評価基準の史的展開」（『一橋研究』第12巻第2号、1987年7月）、平岡さつき「評価基準転換が教育の本質に及ぼす意義——1920～30年代における綴方作品評価基準の検討を通して」（『上田女子短期大学紀要』第28巻、2005年）がある。